

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22830133

研究課題名（和文）聞こえない者のアイデンティティ発達における心理臨床的支援システム構築の基礎的研究

研究課題名（英文）Basic Research on the system of psychological support with Deaf people of identity development

研究代表者

甲斐 更紗 (KAI SARASA)

立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストドクトラルフェロー

研究者番号：40589636

研究成果の概要（和文）：

聞こえない者のアイデンティティ発達における心理臨床的支援開発を目的に、聞こえない者をもつ、聞こえる母親への面接調査、聞こえない者のグループの参与観察、関係者への面接調査を実施した。海外における、海外における、聞こえない者や、聞こえる家族への心理的支援の実践把握調査を行った。結果として、子どもの聴力などによって異なる家族（主に母親）の心理状態と心理臨床的支援のニーズの内容を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：

In this study we investigated the psychological condition and needs of psychological support with deaf people and hearing mothers who have hearing-disabled children for psychological support with Deaf identity development. The methods were semi-structured interviews and fieldwork. As a results, investigation revealed that (1) concrete content of psychological condition and the needs of psychological support, (2) psychological condition and needs of psychological support of mothers are different by the hearing ability of the children.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,240,000	372,000	1,612,000
2011年度	1,140,000	342,000	1,482,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,380,000	714,000	3,094,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：聞こえない者／聞こえる家族／アイデンティティ発達／心理臨床的支援／システム／半構造化面接／参与観察／アセスメント／

1. 研究開始当初の背景

「聞こえない・聞こえにくい」（以下、「聞こえない」とする）者にとって、聞こえる者との相互交渉は、「烙印」と「非受容」、「コ

ミュニケーションの困難さ」によって特徴付けられる。すなわち、聴者とのコミュニケーションは、聞こえない者に「聞くこと＝話すこと」から緊張を生じさせるとともに、その

処理の方略が一層の緊張と困惑を引き起こすこととなる (Higgins, 1980)。従来語られてきた、聞こえない者が社会的心理的に自立するというイメージは、「限りなく聞こえる人に近づくこと」であった。したがって、「話せない」「音声によるコミュニケーションができない」ことは、ネガティブな自己の肥大、対人関係形成の困難などが引き起こし、聞こえない者のアイデンティティ発達において、「主体の感覚」をもって生きることが困難であった (坂田, 1990 ; 岩田, 2002etc)。

このような状況を打開するため、聞こえない者の社会的心理的自立に向けて、聞こえない本人がありのままの自分でいられるよう、主体の感覚を確立できる「アイデンティティ発達支援」が試みられるようになった。

中でも、聞こえない青年への集団精神療法 (心理臨床的支援のひとつ) を実施する過程において、メンバーが経験を語り合うことが、主体の感覚を確立させることとなることが報告された (Hernandez, 1999)。我が国においては、河崎 (1996etc) によって、聞こえない者への心理臨床的支援の取り組みが始まったものの、個人へのアプローチによるものがほとんどであった。このため、甲斐 (2004) は、ろう学校高等部生徒を対象とした、教育現場で実施可能なグループアプローチを試みたが、結果的に対象者に大きな変化が生じなかった。その理由としては、人は家族、学校、友達など、さまざまな集団に身を置くことによって、言語やルール、文化を共有し、それらを自分の中に取り入れながら、自分を形成していくが、こうした体験は「ことば」、「語り」によってまとまりが与えられる。しかしながら、聞こえる親をもつ聞こえない者においては、家族との関わりの中で「語る」といった体験が乳幼児から現在までの間で形成されなかったことによるものと考えられる。

このような状況におかれた聞こえない者に対しては、アイデンティティ発達や家族との関係の様相に応じた心理臨床的支援を行うことが不可欠であるが、聞こえない者のアイデンティティ発達と聞こえる家族との関係の様相を的確にアセスメントする手段は、未だ確立されていない。

聞こえない者をもつ親の9割以上は聞こえる者であり、「聞こえない世界」は身近なものではないことから、「聞こえない」ことに対して否定的な態度を示すこととなる。聞こえない者は、成長するにつれて、聞こえる親と違う聞こえない自分を自覚し、「聞こえる親みたいにはなれない」と苦しむなど聞こえる親と聞こえない者の間に、コミュニケーションの疎通がうまくいかないことが多い。このことが、聞こえない者のアイデンティティ発達を歪めることに繋がると予想されるこ

とから、聞こえる家族の状態に応じた心理臨床的支援を行うことが必要である。

2. 研究の目的

聞こえない・もしくは聞こえにくい (以下、「聞こえない」とする) 子ども・大人 (以下、「者」とする) 達の心理臨床的支援を、アイデンティティ発達の見点からみた心理臨床的支援システムに構築することが不可欠である。システム構築に向けて、①聞こえない者のアイデンティティ発達と聞こえる家族関係の様相、②聞こえない者をもつ、聞こえる家族の心理状態の評価、③並びにこれらの観点に立った心理臨床的支援に関するニーズの把握、の調査を行い、①、②、③をもとに、聞こえない者、聞こえる家族の支援・教育に携わる人達が実践できる、聞こえない者や聞こえる家族に対する心理臨床的支援方法を開発する。それによって、聞こえない者が健全なアイデンティティを発達させ、社会的心理的に自立を成し遂げられるようにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 先行研究のレビュー・実践の情報収集及び分析と課題の整理 :

先行研究のレビューや国外における実践に関する情報収集を行う。また、これまで指摘されてきた聞こえない者や聞こえる家族に対する心理臨床的支援に関する課題を整理する。

(2) 聞こえない者のアイデンティティ発達過程、発達が困難な要因及び聞こえない者をもつ家族や関係者などが抱える問題やニーズの分析 :

①聞こえない者をもつ聞こえる家族を対象として、半構造化面接や質問紙調査を行う。当該調査の結果に基づき、聞こえる家族の心理状態を把握する評価作成、心理臨床的支援に関するニーズを抽出する。

②聞こえない者を対象として、参与観察調査を行い、聞こえない者のアイデンティティ発達と聞こえる家族の関係の様相を把握するための評価を作成する。

③聞こえない者をもつ家族や彼等への支援・教育に携わる人達 (ろう学校教員、難聴児通園施設・聴覚障害者支援施設職員など) への半構造化面接を行う。

4. 研究成果

(1) 平成22年11月1日から11日にかけて、聞こえない者や聞こえる家族への心理臨床的支援の取り組みを展開させている英国に渡英し、情報収集・聞き取り・視察を行った。視察は、国 (Mental Health NHS Trust) が提供している The National Deaf Children, Young People and Family Services (National

Deaf CAMHS)がある London (South West London and ST George' s NHS Trust Corner House, Spring Field Hospital) および Cambridge (Heron Court, Ida Darwin Hospital)、The National Deaf Children' s Society (NDCS)などであった。

関係者からの話では、英国政府では、聞こえないことを社会・文化的視点からとらえ、手話を固有の言語として認識し、支援促進するための予算を組み込んでいた。Primary care trust サービスも行っており、地域に配分して、補助サービスを提供していた。

① London (South West London and ST George' s NHS Trust, Corner House, Spring Field Hospital) では、家族と精神科医、手話通訳者、臨床心理士、コミュニケーションワーカー、メンタルヘルスワーカーなどが参加して話し合うという、家族中心の支援を行っていた。

② cambridge (Heron Court, Ida Darwin Hospital) では、さまざまなスタッフが、親と子がコミュニケーション (情緒的交流) ができるように支援していた。

③ NDCS は、家族支援に焦点をおいており、Family-Friendly Hearing Service (FFHS) というサービスが設定され、家族がストレスに晒されることなくリラックスした状況で支援を継続して受けられるようにする、実際に保護者が Deaf community と関わる機会を設定し、子どもの発達の可能性、子育て全般についての見通しをもつためのガイダンス (心理臨床的支援の一つとしてのガイダンス) を提供していることが分かった。

④ 支援する担当者も聞こえない、聞こえにくいことを肯定的に捉えるためのトレーニング (聞こえないことを医学的モデルでみるのではなく、社会的・文化的モデルで捉える) を受けることを必要としていることが分かった。

⑤ Mental Health NHS Trust である The National Deaf Children, Young People and Family Services では、聞こえる家族を支援するための DVD を制作していた。また、聞こえにくい子と聴者の家族との関係をアセスメントするツールに関する情報を入手することができた。これは我が国でも活用できるものであると考えられ、我が国で実施できる支援方法内容の構想が示唆された。

①から⑤を通じて、英国における心理臨床的支援の実態の一部を把握することができた。

平成 23 年 11 月に、グローバル COE 「生存学」創成拠点 国際プログラム (2011 年 11 月) にて、「韓国の聴覚障害教育関係者にインタビューし、韓国の実情など把握を行った。

(2)

①平成22年8月から、聞こえない者 (高校生、成人) をもつ母親を対象として半構造化面接を実施した。対象者は、関東地区の難聴児をもつ親の会、関東地区・関西地区の情報提供施設および個人ルートから紹介を得た11名であった。各々に対して各1~3時間程度 (平均2時間)、半構造化面接による調査であった。具体的面接の前に、性別・年齢・家族工税などの事実確認のために、フェイスシートに記入してもらい、子どもが生まれてから現在までの生活の経過について自由に語ってもらった。調査対象者の話が滞った場合は、必要に応じて質問した。そして、母親の語りを質的分析 (オープンコーディング法) した。

結果として、8つの大カテゴリーが生成された。

(a) 我が子が聞こえないと分かった前後の母親の心理状態

(b) 我が子の発達段階ごとに変化する「聞こえない」ことと「聞こえる」ことに対する感情

(c) 茶の間で孤独だった我が子に対する心情

(d) 聞こえない子と聞こえるきょうだいの関係についての心理状態

(e) 聞こえない子と聞こえる父親との関係についての心理状態

(f) 同じ悩みを持つ母親同士のつながりを通しての自己への回帰

(g) 教育・医療現場に対する心情

(h) 望ましい心理臨床的支援の姿

(a) では、我が子が聞こえないと分かった母親の多くは子どもが生まれる以前に「聞こえない」ことに直面したこともなく、また「聞こえない」事に関しての知識も持ち合わせていないため、不安に陥りやすく、子どもの発達の見通しをどのようにたてることができない状況がみられた。

(b)、(c) では、母親は聞こえない子の発達段階ごとに、「聞こえない」ことに対して、肯定的な感情と否定的な感情が交互に発生し、同時に「聞こえる」ことに対する肯定的な感情と否定的な感情が交互に発生していた例が多く存在した。こうした感情の時間的変化はいわば、二重らせん構造にあったことが考えられたの様相を呈していた。そのことが、母親と子どもとの関係を難しくさせていることが推察され、子どもの発達段階ごとに、母親に対しての支援を段階的に提供することが課題としてなっていた。

(d)、(e) では、母親が聞こえない子どもと周りの家族との関係についても悩んでおり、聞こえない子と周りの家族との関係が、母親と子どもとの関係にも影響があることが推

察された。

(f)、(g)、(h) は母親がこれまで関わってきた人々に対する思いである。

⑧から、母親が望む支援の具体化の必要性が課題として抽出された。

これらの母親の心情から、聞こえない者を子どもにもつ母親に心理臨床的支援ニーズが存在することが示唆された。

以上から、(a) 母親は聞こえない子の発達段階ごとに、「聞こえない」ことに対して、肯定的な感情と否定的な感情が交互に発生し、同時に「聞こえる」ことに対する肯定的な感情と否定的な感情が交互に発生し、それが、子どもと母親との関係を難しくさせること、

(b) 母親に対して子どもの発達段階に応じた段階的な支援が必要ということ、(c) 8つの大カテゴリーが、母親の心理状態の評価項目と心理臨床的支援ニーズの評価項目、聞こえない者のアイデンティティ発達と聞こえる家族との関係の様相を把握する評価項目として活用できる可能性、が仮説として考えられた。

次に、聴力が 90dB 以下の子どもをもつ母親グループと、90dB 以上の子どもをもつ母親グループに分けて、母親の語りそのものを質的に分析した。結果の一部を Table 1 に示した。

Table1. それぞれの母親の語り

大カテゴリー	聴力が90dB以下の子どもをもつ母親(N=9)	聴力が90dB以上の子どもをもつ母親(N=4)
【手話について】	「子どもが(手話)覚えては何度も言っていたんだけど、もうどうも理解できなくて覚えなかった」	「うちの子どもは「聞こえる」から、(私の)手話を覚えても子どもは手話を使わないし、手話を教わらないから、意味がわからない」 「うちの子ども以外に社会の中で(聴)聴力が重い子どもがいるから、それが人々たちのために手話を覚えた」
【茶の間で孤独だった我が子に対する心情】	「家族みんなが集まっていて、その中で(聞こえない我が子が)一人である。や、思うと、寂しい思いをさせたんじゃないかな、みんなの話が分からず、会話の中心にならなくて、」	「家族の中で(聞こえない我が子が)一人だったし、聞こえないことでもあったと思うけど、大丈夫だったと思いはすね、昔としては寂しかった、ですね。」
【望ましい心理臨床的支援の姿】	「(聴覚障害)分かったら早く教育方法とか学校とか紹介されたら具体的な方法とか話があったら、ほっとしている。それぞれの発達段階に応じたコミュニケーションとか発達についての話とか情報があればいい」 「(聴覚障害をもつ)親の会のような集まりがほしい」	「子どもが聞こえにくい」ということを誰も理解してくれなかった。(聴覚障害をもつ)親の会も重い(聴力の)子の親ばかり。同じような子どもを育てている親に会いたかった」 「聞こえにくいかもしれないと言われたが子どもを育てようとはっすらかしにされた。その間の気持ちを受けとめてくれる場がほしい」

聴力が90dB以下の子どもをもつ母親の【茶の間で孤独だった我が子に対する心情】から、軽・中等度難聴は三者以上の会話になると発話者の特定がむずかしくなり、複数の発話の重なりによってほとんど対処できなくなることを家族が認識もしくは理解していない可能性が考えられた。また、【手話について】から、手話を自分の子どもとのコミュニケーションに活かそうという感覚がないことも考えられた。その一方、【望ましい心理臨床的支援の姿】では、「聞こえにくい」という特性のため家族が支援を受けられないという悩みから、個別心理カウンセリングやピアカウンセリングを求めていることが考えられた。聴力が90dB以上の子どもをもつ母親たちの【手話に

ついて】では手話が覚えられないという悩みが出され、【茶の前で孤独だった我が子に対する心情】として、寂しい思いを子どもにさせたという気持ちが出ていたことが考えられた。

そのため、それぞれの発達段階に応じたコミュニケーションや対応方法についての情報提供による支援を求めていることが考えられた。

それらの結果をもとに質問紙項目を抽出し、質問紙を作成した。近畿地区の難聴児親の会の協力を得て質問紙を配布回収した。

②平成 22 年 7 月から、聞こえない当事者が 5 ～ 10 名参加するグループワーク活動を対象し、2 か月に 1 回程度行われているグループワーク活動を参与観察した。また、関東や関西でのろう学校乳幼児教育相談の公開授業(母子同席の授業)のフィールドワークを実施した。

得られたエピソードを KJ 法で参与観察分析した。これまで分析を実施したデータからは、聞こえない者の聞こえないもののアイデンティティ発達と聞こえる家族の関係の特徴として、(a) 一番身近である家族が「聞こえない」ことについて理解がない→自分は「聞こえない」人なのか「聞こえる」人なのか、足元がぐらつく感覚がある、(b) 「たわいない」話の輪に入れないことの困難さ、(c) 一番分かってもらいたい人たち(家族のことを意味している)に、伝えたいことが伝わらないときの感情コントロールの難しさ、(d) 小学・中学・高校のとき家族に情緒的交流を求めていたのにかなわなかったが、成人(20、30代になった)した現在、家族が情緒的交流につとめようとしている姿に矛盾と苛立ちを感じる、ことが明らかになった。

③平成24年2月、3月に聞こえない児童生徒の支援に関わる支援者(関東地区の児童関連施設、九州地区の特別支援学校)2名にインタビュー調査を実施した。

(1) から (2) の調査の結果、得られた研究成果を支援現場にフィールドバックするために、手話通訳者や聴覚障害児関連施設職員などで構成された手話で語る心理臨床研究会や、聴覚障害/ろう(聾)者の言語・文化・教育を考える研究会を立ち上げ、慶應義塾大学松岡和美教授をお招きし、「手話言語学入門：手話の文法・手話失語・ろう児の言語獲得」というテーマで専門的知識の提供をしていただき、知見を深めることができた。

研究の成果や知見などを以下のホームペー

ジを作成して、情報発信している。
主に、

<http://www.arsvi.com/d/h02.htm>
<http://www.arsvi.com/d/h02rouid.htm>
<http://www.arsvi.com/o/deaf01.htm>
<http://www.arsvi.com/d/iced2010.htm>
<http://www.arsvi.com/d/h02coda.htm>
などである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①甲斐更紗・片岡美華・雲井未歎・内田芳夫、
資質向上をめざした特別支援教育教員養成

の試み～オンライン・ポートフォリオの活用を通

して～鹿児島大学教育学部教育実践研究
紀要、査読無、第20巻、2010、pp279-286.

[学会発表] (計5件)

①甲斐更紗、聞こえない子をもつ家族への心理臨床的支援について～子どもの聴力によって異なる母親の心理状態や支援ニーズ～、日本発達心理学会第23回大会、2012年3月10日、名古屋国際会議場(愛知県)

②카이 사라사 (甲斐更紗)、일본의 청각장애아를 둔 가족에 대한 심리적 지원

(日本における聴覚障害児をもつ家族への心理的支援)、第2回障害学国際セミナー、2011年11月9日、立命館大学(京都府)

③甲斐更紗、「聞こえない」児・者の家族への心理臨床的支援に関する研究-聞こえる母親への面接調査について、日本特殊教育学会第49回大会、2011年9月23日、弘前大学(青森県)

④甲斐更紗、聞こえにくい子どもをもつ聴者の母親の意識変化-集団療法の実践を通して-、日本発達心理学会第22回大会、2011年3月26日、東京学芸大学(東京都)

⑤Sarasa KAI、The compare to change process of mothers who is children of Cochlear Implants and not Cochlear Implants in Japan: Through an attempt to group Therapy、21st International congress on the education of the Deaf、2010年7月18日-20日、(Canada・バンクーバー)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

甲斐 更紗 (KAI SARASA)

立命館大学・衣笠総合研究機構・ポストド
クトラルフェロー

研究者番号：40589636